

式辞

本日、東京都立保谷高等学校において、三年間にわたる教育課程を修了し、新たなステージへと壮途に就く卒業生の皆さんに、謹んで心よりお祝いを申し上げます。

卒業生の皆さん、ご卒業、誠におめでとうございます。

皆さん、三年間の「自分探究の旅」はいかがでしたか。どんなことを思い、感じながら今日の日を迎えているのでしょうか。声を張り上げ、仲間と全力で挑んだ体育祭。試行錯誤を重ね、力を合わせて作品を創り上げた文化祭。焦りや不安に押しつぶされながらも、心を一つにして歌った合唱祭。進路実現に向け、身を粉にして学習に励んだ日々。一勝のために技を磨き続けた部活動。世界を知りたくて海を越えた修学旅行。共に笑い、共に涙し、時に悔しさに胸を熱くした、かけがえのない友の存在——。思い返せば、数え切れないほど多くの場面で、走馬灯のように皆さんの心に浮かんでくることでしょうか。

学校生活の中で、皆さんはたくさんの経験を積み重ねてきました。生涯忘れられない鮮烈な記憶があれば、砂粒のように小さく、ふとした折に蘇るかすかな記憶もあるでしょう。しかし、その一つひとつが、皆さんの血肉となって涵養され、確かな「概念」として形を成し、これからの人生を導く羅針盤となっていきます。石の上にも三年、この歳月を経て、皆さんは人格ある一人の立派な人間へと成長しました。どうか自らの歩みを信じ、これから始まる未来へ向かって力強く前進してください。

旅立つ皆さんに最近の出来事から二つのエピソードを挙げてエールを送ります。

2月に開催された冬季オリンピック、スノーボード男子ハーフパイプでは、戸塚優斗選手が見事金メダルを獲得しました。戸塚選手は幼くして競技に触れ、中学3年で全日本選手権を制し、一躍脚光を浴びる存在となりました。しかし、2018年の平昌オリンピックでは、決勝2回目の滑走で転倒し担架で退場。2022年の北京オリンピックでもミスや転倒が続き10位に終わりました。二度の挫折は深い心の傷となり、以後、スタート地点に立つと、「失敗する」という思い込みが先立つようになりました。大好きだった競技が次第に楽しくなくなり、「もうやめよう」とまで思い詰めるほどの苦境に陥っていきます。そのような中、迎えたミラノ・コルティナ大会。戸塚選手はこれまでの逆境を乗り越え、ついに悲願の金メダルをつかみ取りました。優勝インタビューでは、次のように語っています。「長いオリンピック、最初の平昌から始まって、うまく滑れなくてずっと苦しんでいました。ここ何年間でやってきたことが報われました。何回も『やめよう、やめよう』と思ったんですけど、その度にいろんな人に支えられて、本当に感謝しています。」

私は、この「やめよう、やめよう」という言葉を聞いたとき、世界の檜舞台に立つメダリストでさえ、私たちが感じる「もう無理だ、やめたい」という思いを同じように抱えているという事実、ハッとさせられたのです。不撓不屈の精神で前に進み続ける、そんなイメージのあるメダリストでさえ、その陰には迷いも弱さもある、そのことに、人間らしさと深い親しみを感じざるを得ませんでした。

皆さんも、この三年間の中で、「やめたい」と感じた瞬間があったことでしょうか。挑戦してもうまくいかないとき。仲間との差を痛感したとき。苦しくて仕方がないとき。部活動でも、勉強でも、同じような思いを味わった人がいると思います。だからこそ、戸塚選手の言葉は、今を生きる私たちに勇気と希望を与えてくれるものだと感じるのです。

二つ目のエピソードをご紹介します。

本校文化祭の余韻が残る9月9日、一頭の競走馬が静かに天命を全うしました。高知競馬場で長く愛されたハルウララです。1996年に北海道で生まれ、小柄で臆病な気質ゆえに買い手がつかず、高知で走る道を与えられたハルウララ。1998年、2歳9か月でデビューするも結果は5頭中5着。その後も年間20回ほどレースに出走したものの、連敗は続き、2003年5月にはついに87連敗に達します。競走馬は勝てなければ引退という厳しい世界にあります。しかし、担当調教師は「走れるうちは走らせてあげたい」と考え、ハルウララを信じてレースに送り続けました。

そんな折、高知競馬場の実況アナウンサーがハルウララの連敗記録に目を留め、これをきっかけに地元紙へ記事を提供。するとその話題は大手新聞社、テレビのワイドショーにまで広がり、ハルウララは一気に全国的な存在となりました。同年12月、100連敗という前代未聞の記録を迎えたレースには5000人の観客、33社120人の報道陣が集まり順調に敗北。さらに106戦目には、中央競馬界の第一人者・武豊騎手が騎乗。しかし、武豊騎手をもってしても勝利をつかむことはできませんでした。こうしてハルウララは生涯0勝113敗のまま、静かにターフを去りました。

一度も勝つことのなかった一頭の馬が、なぜこれほど多くの人々の心をつかんだのでしょうか。ハルウララが走っていた当時、日本はバブル経済崩壊後の混乱期にありました。これまで安定の象徴とされていた終身雇用が揺らぎ、解雇される人が増え、「会社に残った人は勝ち組、職を失った人は負け組」という価値観が社会を支配していました。まるで人生そのものが、速く走れた者だけが価値を持つレースであるかのように扱われていたのです。そのような時代背景の中で、たとえ勝てなくても懸命に走り続けるハルウララの姿は、負け組の星、愚直一徹の生きざまとして、深い共感と励ましをもたらしました。ハルウララは、ひたむきに生きる態度そのものに気高い価値が宿るということを体現し、そして人々はハルウララの姿に自分自身を投影することで、生きる希望を見出したのです。

これから皆さんも、それぞれの道を歩んでいくことになります。時には、思うようにいかず、自分を誰かと比べてしまう日もあるでしょう。しかし、どうか忘れないでください。人生の価値は“勝ったか負けたか”で決まるものではありません。世界の頂点を極めたアスリートであっても、そして一度も勝てなかった凡庸な競走馬であっても、共通しているのは、自らの足で、あきらめずに走り続けたということです。その歩みこそが、人を強くし、豊かにし、そして「自分らしさ」を磨き上げていくのです。今日、卒業の日を迎えた皆さん一人ひとりの旅路が、どうか「自分らしさ」で満たされますよう、そして、どんな境遇に至っても、あきらめず歩み続けることを心から願っています。

保護者の皆様、本日、お子様をご卒業をお迎えになられましたこと、心よりお祝い申し上げます。

振り返れば、この十八年間は決して平坦な道のりではなかったことと拝察いたします。乳児期の献身的な介助、幼児期の奔放な成長を見守る日々、児童期の社会性の涵養、そして「自分とは何か」を模索し続けた思春期——。節目ごとに、喜びや幾多のご苦労があったことでしょう。その温かなご支援と深い愛情に包まれて、お子様は本校を旅立ちます。本日、ご家庭へ戻られましたら、ぜひ食卓を囲みながら、高校三年間の思い出話に花を咲かせていただければと存じます。また、これから先、もうしばらくは、親御様のお力添えを有する場面があるかと存じます。その折には、どうかこれまでと変わらぬ温かきで見守りください。

卒業生の皆さん。いよいよ旅立ちのときです。今日という佳き日を胸に刻み、保谷高校で過ごした日々を、そして保谷高校の一員であったことを、矜持をもって歩んでください。そして、折に触れて母校を思い出し、静かに見守っていただければ、この上なく嬉しく思います。皆さんの一人ひとりが、前途洋々たるものでありますように。皆さんのご健勝とご多幸、そして社会における大いなる活躍を、心より祈念いたします。

2026年3月7日

東京都立保谷高等学校長

石丸 昌延